

不登校生徒に対するカウンセラーとしての関わり

～地域相談機関で出来る援助と学校内で出来る援助～

中山文子

目次

I. はじめに

II. 事 例

事例1 地域公立教育相談室相談員として相談所で関わった不登校事例

事例2 スクールカウンセラーとして学校内で関わった不登校事例

III. 考 察

i 事例1〔地域公立教育相談室事例〕についての考察

ii 事例2〔スクールカウンセラー事例〕についての考察

iii 事例1と事例2についての比較考察

IV. おわりに

I. はじめに

今まで地域公立教育相談室相談員・スクールカウンセラーの仕事を通して、不登校を主とする学校不適応事例や、養育に関する数多くの事例と関わってきた。

公立の教育相談室とは学校教育振興のために設立された教育委員会管轄の教育施設であり、子どもの教育上の問題に対する個別の心理援助を中核としている(馬殿,1998)。県の組織である場合と各市町村の組織である場合とがあり、運営の仕方も様々である。基本的には相談者が来室して、相談員が相談室内で相談に応じる形をとる。教育相談室相談者は児童生徒に限らず、保護者や教師なども対象となる。そのため、教育相談室では心理的援助のみならず、教育的援助も含めた多面的な援助が期待されている(喜田,2000)。

スクールカウンセラーは平成7年度より、児童生徒の臨床心理に関して高度に専門的な知識・経験を有する者として、学校のカウンセリング機能の充実を図るために全国の公立学校に位置づけられた(臨床心理士資格認定協会,2002)。学校の組織に組み込まれており、配属された学校内で職務を行う。現在の青少年の心の成長が困難な状況に対して、心の成長に寄与することが求められている。

本研究では、筆者の過去の事例の中から不登校の事例を取り上げて新たに見直し、検討していく。学校現場で不登校の問題は、教員が対応に困っており専門家に関わってほしい問題のトップに挙げられている(河村,2005)。不登校の数は長野県教育委員会の統計によるとH16年度は中学生で約2000人にも及ぶ。きめ細やかな支援体制の充実、地域専門家とのより良い連携が求められている。地域で活動する心の専門家として、公立教育相談室という学校の枠組みの外で出来る援助と、スクールカウンセラーとしての学校現場で直接出来る援助を事例を通し比較検討したい。

II. 事 例

事例1 地域公立教育相談室相談員として関わった不登校事例

〔来談者〕 A (中2,女子)

〔家族構成〕 父親 母親 姉(高2)

〔主 訴〕 不登校

〔相談経緯〕

中1の3学期から学校を休み始め1ヶ月過ぎ、母親から電話で相談の申し込みを受ける。Aは「行きたくない」と言うのみで理由ははっきりしない。焦っている様子もなく、家でのんびりしているとのこと。親子で相談室に来室してのカウンセリングに誘う。

〔面接形態〕

Aは筆者が担当し、母親は別の担当者が担当し、週1回母子並行面接を行った。

〔面接経過〕 以下、Aの発言を「 」、カウンセラー(以下Co)の発言を< >で記す。

#1 初回面接

Aと共に相談室に入室する。Aは緊張している様子はなく、部屋を見渡す。<ここは、Aちゃんのために力になる所だよ。安心してね>と声をかける。Aに話を聞いていくと、少し偉ぶった態度で「学校つまらない。いやな奴がほとんど。勉強は家でも出来るし」と話す。特に学校に行きたくなかった強いきっかけはないとのこと。Aの言い分を聞きつつこれからはどうしたい? これからも休むのかな?>と質問を投げかけると、これからのについては答えられない。強がって焦

っていないような態度をとっているが、実際はこのままでいいとは思っていない様子に見える。<力になるからゆっくり考えていこうね。ここではAちゃんの好きなこともできるよ。やりたいことあったらやってみよう>と声をかけると頷く。

#2～#4 面接初期

最近の様子を聞き、学校の話も少しする。学校に対しての気持ちは変わらないとのこと。家にいることについては「一人でも漫画読んでいけばいいし、別にいやじゃない」と言う。絵を描きたいと言うので、一緒にアニメの絵を描く。アニメに関して詳しく、色々教えてくれる。Coが、<詳しいよねー。その面白さわかるよ>などと話にのると、非常に嬉しそうで、色々な事を教えてくれる。普段家に一人でいて他者との関わりがないため、自分の気持ちが通じる人が出来たことが嬉しいのだと感じる。

相談室は学校とは違うので、ここで気持ちを開放してのびのび気持ちを表現する事と、Coとの関係を深める事を初期の目標に置く。Coとの関係に慣れてくると、Aはピアノを弾いてくれるようになり、一緒に歌を歌うようにもなった。母親担当者からの話しだと、Aは相談室への来室を楽しみにするようになっているとのこと。

*母親担当者が担任の先生と連携をとったが、先生はAについてうんざりしていて、積極的に関わりたくないという様子だったとのこと。学校の対応に期待が持てないと感じる。また、母親も、Aについて困ってはいるようだが他人事のような所があるとの話を聞く。姉が優秀で、自慢できる子どものようで、姉の話はよく出るがAのことになると、『よく分からない子です』と曖昧な言い方しか出来ないとのこと。

#5～#10 面接中期①

相談室には順調に来室でき、Coに安心して色々な話をしてくれるようになったが、学校についての話はなかなか広がらず、Aは諦めてしまっている様子がある。母親担当者と検討し、相談室に来ている目的をはっきりさせ、少しずつ外部や人との関わりを広げていくことが必要であるから、学校が無理ならば少人数の適応指導室を勧めていく事にする。

Aに聞くと、学校はいやだけれど適応指導室ならば少しは考えてみてもいいとのこと。そこで、適応指導室に向けて話し合う。学校に対してのイメージが悪く、「どうせ学校なんて意味がない。いやな奴がほとんどだし」と言っているAに、適応指導室は学校の雰囲気とは違うことを伝え、安心させる。

#11～#18 面接中期②

適応指導室に行き始める。最初はわずかな時間しかいらなかったが、徐々に時間を増やせるようになる。友だちも出来始め、出来事を楽しそうに話してくれるようになった。しかし、不満の方が多く、「あの先生は役に立たない」「やりたくないのに強制された」「真面目で勉強ばかりやっている奴がいる」など訴える。

そこで、状況を知るために適応指導室の先生と連携を取ることにした。先生の方からは、『ちょっとした事ですねてしまう。やりたくない事はやらない』と対応に困っているようだった。適応指導室に行き始めたことで、Aの特徴がより見えてきて、課題もはっきりしてきた。カウンセリングでは、Aとの時間を楽しみながらも、不満を聞き、<腹立つことが事が多いよね>と返すと頷く。<そういう事をいつも考えてるの?>と聞くと「いつもは考えてない」とのこと。<よかった。いつもいやな事ばかり考えてるんじゃないいらするよね>とAの立場に立ちつつ、より楽しく気持ちよく過ごすにはどうしたらいいか2人で考えた。言われると頭にくるから言われる前にやる事、気にいらなければ無理に仲良くしなくてもよいから挨拶はする事、などを話し合った。

#19～#27面接後期

適応指導室で徐々に、嫌な事でもやるべき事をきちんとやれるようになってきた。嫌がっていた友だちとも「案外話が合った」と言い、仲良くなっていった。Coは、Aが成長してきた部分を「嫌な事でもよくやったね」<話してみたら気が合ったなんて良かったね。話してみるもんだね>と言葉で伝え返すようにしていった。Aは、当然といった感じで褒めても感情をあまり表に現さないが、今までの関わりの中でAの様子を見てきていると、Coに支持され喜んでいる感じが伝わってきた。

#28～#31 面接終期

適応指導室で順調に過ごせるようになって、相談室には来たいと言っていた。<そろそろ終わりを考えようか>と言うと「まだ勉強が心配だし」などと理由を言い、相談を終わりにする事に心配があった。間隔をあけて会い、様子を見てCoから学期の区切りで終結を切り出すと、その時はAも納得して終結となった。

事例2 スクールカウンセラーとして学校で関わった不登校事例

〔来談者〕B(中1,女子)

〔家族構成〕父親 母親 妹(小学校高学年) 妹(小学校低学年)

〔主訴〕不登校

〔相談経緯〕

1学期中旬から突然学校を休みだし、1週間になる。学校が怖いと言って夢でうなされるほどであり、外に出られず近所さえも歩けない状態である。友だち1名に無視をされたり悪口を言われた事がきっかけらしいとのこと。担任とも話しが出来ず、スクールカウンセラーとして家庭訪問し、関わってほしいと依頼される。

〔面接形態〕初回の家庭訪問の後、筆者の勤務形態に合わせ週1回、学校の相談室内で面接を行った。

3回目からは母親面接を2週間に1回程度行った。

〔面接経過〕以下、Bの発言を「 」、カウンセラー(以下,Co)の発言を< >で記す。

#1 家庭訪問

家庭訪問をする。Bの表情はかなり堅く、不安そうである。<こんにちは。心配で会いに来たよ。会ってくれてありがとう>Coが優しく声をかけると少し表情が柔らかくなる。部活の友だちから受けた嫌がらせについて話してくれる。その友だちは先生のいない所でBについての悪口をこそこそ言っており、悪口を知らない人にまで広めていると思うとのこと。去年からずっと我慢していたため、もう限界がきて部活に行きたくなく、悪口を広められたので学校にも行きたくないとのこと。Bは辛そうであったが具体的に話してくれる。今まで自分の気持ちを話せる相手がいなかったとのことで、Bの話をもまずはしっかりと聞いて気持ちを受けとめた。

ひとしきり話を聞き、後半Coからクラスや今後について聞いてみた。<クラスの子はどう?>「クラスは嫌ではないです。楽しいです」<クラスは嫌じゃなくてよかった。その子と別のクラスでよかったね>と言うとBは少し微笑む。<学校について連絡がくるのは?>「別にきてもいいです」<これからどうしたいと考えてる?>「友だちに会いたくないです。悪口が広まっているかもしれないし。でもこのまま学校休んだらどうなるのかわからないです。休んでも大丈夫ですか?」と聞いてくる。Bは想像していたよりしっかり話しが出来、登校についても心配しているようだった。生活リズムも乱れておらず、体調を聞くと、特に具合の悪い所はないとのこと。うなされる夢も一度見ただけで今は見ないと言う。

<その子、すごく意地悪だよ。ひどいね。Bちゃん辛いね>など基本的には共感を大切にしな

がら、クラスでの友人関係が悪くないため、様子を伺いつつ試しに学校に誘ってみる。今の状態では苦しいと思うけれど、休みが続くともっと登校しにくくなる可能性も伝えた。「今は生徒に会いたくない」と言うので、こっそりカウンセリングだけ別室でやるから、まずは相談だけに来るようにと誘うと、自信はなさそうだが絶対無理という感じでもなく「こっそり行けるなら・・・」と言う。＜悪くないBちゃんが休まなくてはいけないなんておかしい。ゆっくりでいいからやれる所からやって行こうよ。応援するね＞と励ますと頷いた。

*客観的事実はないのだが、Bは部活の友だちが悪口をいいふらしていると思い込んでおり、悪い方向にしか考えられなくなっていた。悪口が広まっているとは限らないことを伝え、クラスの友人関係など、うまくいっている部分もあり、そちらにも目を向けさせていった。身体症状は強く出ていなかったため、気持ちを共感しつつ、この状況を切り開くにはどうしたらいいかという方向に考えていくように声をかけた。

学校では先生方と話し合いを持ち、協力し合って登校支援をしていこうと決めた。まずは昇降口以外の入り口を用意し、登校できたら、学校内の相談室でカウンセリング行う事にした。配布物などの情報はBの了解を得てなるべく学年の先生から伝えて頂き、学校の流れを常にBが把握できるように心掛けるようにした。また、関わって来られた先生方から情報収集をし、トラブルになった友だちの特徴、客観的状況を聞き、仲のよい友だちにはそっと声かけをしてもらうようにした。

#2～#5 面接初期

2回目から相談室に登校出来るようになった。緊張・不安感は強いが、「入れないかと思ったけど入れました」と言い、達成感も感じられた様子。家から出られて学校に入れたことで、少しずつ学校への恐怖感が減っていく。Coは不安な気持ちも共感しつつ、なるべく出来たところを中心に言葉をかけた。＜キョロキョロしなくなってきたよね＞と言うと「前よりドキドキしなくなりました」と徐々に余裕が出てきた様子。以前学校で楽しかった事などを笑顔で話してくれるようにもなった。仲の良い友人も沢山いるとの事で、今まで友人関係はうまくいっていた様子。先生方からの情報でも、Bは友人関係は特に心配なかったとのこと。

*先生から両親が非常に心配しているとの情報を得て、母親とも話し合いを持った。母親が非常に焦っていたために、少しずつ変わっていくことを過去の事例を交えて伝え、焦りがBに伝わらないようにして欲しいことをお願いした。そして母親面接も2週間に1度のペースで継続していくことにした。Bは母親との会話が少ないため、母親は何もBから伝わらないので余計に焦ってしまうと言う。Coは、母子間の橋渡しの役割を担い、母親に話せる範囲で情報を伝え、母親がまず安心して関わって行けるように心掛けた。また、家での関わり方についても助言していき、母親とBとの関係を悪化させないようにした。

学校の先生方からの情報によると、いじめた生徒は確かにきつい所があり、色々な子の悪口を平気で言う所があったが、今回の事が起こって非常に反省している。これ以上追い詰めるようなことはしないだろうということだった。

#6～#12面接中期

別室登校に慣れてきたが、生徒にまだ会いたくないと不安が強く、人に見られる場所には出られなかった。勉強のことを非常に気にしていて、＜このままだと内申低くなりますか？不登校で〇〇高校行った人いますか？＞など進学にまつわる話をCoに色々聞いてきた。Coからは、まずは目先の事を考えていこうと提案したが、Bの進学へのこだわりと不安が強かったため、不安が解消できる部分から話し合うことにした。担任の先生にお願いし、高校に関しての情報提供や、進学に影響

響すると思われる出席日数についてなるべく正確に伝えて頂き、まだ手遅れではないことを特に強調して話して頂いた。Bは、内容を聞いて安心し、進級・進学という目標に近づいていこうとの気持ちになった。

すると行動面では授業中ならば図書館や、空き教室に行くことができるようになってきた。Coは、出来たことを喜び、Bの信頼している先生にも出来たことを伝え、励まして頂いた。すると、BはCoがいない時でも、信頼できる先生を頼りにして学校にいる時間を増やす事ができるようになった。

#13～#21面接後期

毎日登校し、テストも受けられるようになった。表情が穏やかになってきて、休日に一人で町に出かけ、人混みに入れるようにもなった。クラスの様子を聞いてきたり、自分から積極的に気にかけるようになってきた。<〇〇君は背が伸びたみたいだけど本当かなー。先生がクラスがうるさいって言うけど前は静かだったんです>など気になる様子。知っている範囲で様子を伝え、友人が心配していること、会いたいと言っていることを伝え、特定の友人ならば会ってみたいと言う。そこで話し合い、相談室で給食を一緒に食べることになった。初回は非常に緊張していたが、実際行ってみると<久しぶりに話せて楽しかった。前と変わらなかった>と、明るい表情。友人との給食を継続することになった。

回を重ね、特定の友人との関わりに慣れてきた頃、Coから教室に行くことについて考えてみようという提案をした。Bは不安な気持ちと、やってみようという気持ちの両方があると話したため、割合を聞くと、10のうち行ってみようという気持ちが6あるとのこと。

<行きたい気持ちが上回っているならいくらでも協力するからやってみよう>と伝え、Bに教室にいつなら行けそうか尋ねた。すると、Bは「一週間後の国語の時間ならばできるかもしれないです」と言う。また、席は一番後ろで、友人がそばにいてくれるといいとのこと。

先生方に内容を伝えてもよいとの事で、先生方に情報提供をし、Bが行きやすい状況を作ることになった。授業内容を事前にBに伝え、教室まで信頼している先生に付いて行って頂くことにもなった。その結果Bは、決めた日に教室に行くことができた。

* 担任の先生からクラスの生徒に、もしBが教室に来たら今までと変わらない態度で接して欲しいことも事前に伝えておいて頂いた。

#22～26面接終期

教室に1度行けたBは、調子を崩しがちな時もあったが、徐々に行く回数を増やして行けるようになった。緊張・不安が強く、Coに「緊張するー。どうしよう」と訴えてくるため、<ここまでやってこれたのはBちゃんの力。Bちゃんならきっと慣れていけるよ>と、声をかけ、送り出した。クラスの生徒が自然な態度で接してくれた事で、「普通に話しかけてもらえてよかったです。そんなに注目されてないみたいでよかったです」と話し、徐々に安心感が強くなっていった。そして#26では、「多分大丈夫だと思うから、これから毎日教室に行きます。全て出ます」と宣言し、宣言した通り、教室に完全復帰した。カウンセリングは、また困った時に来るから、次の予定をしなくていいとのことだった。自分の力でやっていた自信がついたようであった。

Ⅲ. 考 察

i 事例1〔地域公立教育相談室事例〕についての考察

① Aの特徴について

小林(2004)は、不登校のタイプを4タイプに分類している。「ソーシャルスキル」の高低、「セルフコントロール」の高低の掛け合わせで分類できる。共にストレスに対処していくために必要な力である。「ソーシャルスキル」とは人とうまく付き合う力の事である。「ソーシャルスキル」が少ない場合には自分の方から問題解決を図ることがうまくできず、対人関係の問題が生じるとその問題が継続しやすい(小林,2003)。「セルフコントロール」とは、自分の目指す目標との関係で、「自分のしたいことをあえてしない事」や、「自分のしたくないことをあえてする事」である。

Aの特徴を考えると、「ソーシャルスキル」が低く、「セルフコントロール」も低いタイプに分類されると思われる。友だちの悪いところばかり見て、自分から距離を置いていく付き合い方しかできなかった所や、やりたくないことは、断固としてやらなかった所など、特徴的な部分がある。

また、うまくできないことを、Aは周りが悪いと決め付けていた。しかし、それには他のせいにするしかないAの自信のなさが根底にありそうであった。粕谷(2004)によると、不登校生徒は自尊心が低いことが明らかにされている。「一人でいい」と言っていたAは、現実的にプラスの体験を重ねていく中で成長し、自尊心を高めていったと思われる。実際後半は悪口や不満が減っていったことから、自信が付いてきて気持ちに余裕が出てきたことがわかる。

② Aを肯定し、気持ちの拠り所になったこと

家庭では何事にも万能な姉が目され、Aは両親からの関心が薄かった。母親面接からも、母親とAとの関わりが少ないことが分かる。母子相互作用の面から考えるとAのぶっきらぼうな所、感情表現力のなさが"わかりにくい子"として親に理解され、ますます情緒的な繋がりが薄くなって行ったのだと思われる。そこで第三者としてCoが関わり、Aのちょっとした感情表出に気付き、その気持ちに寄り添い付き合ったことで、自分のことが分かってもらえるという安心感が育っていったのだと思われる。そして、その安心感を基盤として徐々に集団の中に入れるようになっていったのだと思われる。

③ 行動のプラス面を認め、強化していったこと

面接中期では、特にAの特徴でもあり、適応困難にしていると思われる部分に注目した。適応指導室に入ったことでAの課題がはっきりしてきたため、具体的に話を深めていくための材料ができた。この場面での話し合いは、今後社会生活を送っていくために必要であり、重要であった。前述した「ソーシャルスキル」と「セルフコントロール」の低さがAの課題であり、この部分を中心に面接を進めていった。Aに対し、「やりたくない事はやらない」「むかつく奴とは話さない」ではより不満が溜まる事を実感させ、気分よく過ごせるようになるにはどうしたらいいかを考えた。そして、「いやな事だったけど仕方がないからやった」「合わないと思った友だちと話した」その結果"うまく行った"というプラスの結果をフィードバックした。

認知行動療法の中でも患者が問題対処の方法やセルフコントロールの方法を習得することが重視されている(岩本,1997)。この事例ではCoから、適切な対処行動のヒントを与えたり、2人で協力して方法を考えたりしながら、対処方法を学習していった。特に今回は、出来るだけAが主体的に行動して、その結果うまく行ったと感じられるように心掛けた。今までうまく行かなかった事の方が多いAに、自らの力で乗り越えたと感じてもらうことで達成感を覚え、それが自信に繋がると考えたからである。Aの対処行動に対して、Coはわずかな事でも評価して返し、本人もイラ

イラする事が減ると実感し、結果プラスの行動が定着していったと思われる。

④ Aの今後について

Aが成長してきたとはいえ、まだまだ「セルフコントロール」は低く、身勝手な部分が多くあり、面接を通してCoが出来ることはなかったかと考える。母親に今後のAを見守ってもらうように母親担当者が伝えたが、母親がAに寄り添っていけるかを考えると不安はある。

またAは、表情が一定で嬉しい時でも分かりにくい。もう少し感情表現力を高めることが出来れば今後Aがもっと周りに理解してもらえ、生活しやすくなったのではないかと考える。

ii 事例2〔スクールカウンセラー事例〕についての考察

① Bの特徴について

前述した小林(2004)の分類で考えるとBは「セルフコントロール」が高く「ソーシャルスキル」が低い真面目群に分類されると思われる。Bは目標を決めると、手を抜かずにまっしぐらにそこに向かって突き進む完璧主義で真面目な所があった。また、人からの評価を非常に気にしていて誰からもよく見られたい気持ちが強かった。終結の仕方もやると決めたらやらなければならないとするBの特徴が表されている。ここから、決めたことはきっちりやれるいい子なのだが、臨機応変さ、柔軟性に欠けるBの特徴が見えてくる。小林(2004)によると、このタイプは仲間からみて「格好良く」なければならないとしている。まさに、Bは完璧な自分でいないとクラスの子が相手にしてくれないのではないかとの思いから不安が強かったと考えられる。実際にBに悪口を言った生徒は、Bだけに悪口を言ってはおらず、色々な子の悪口を平気で言う気の強いタイプの生徒だったのだが、Bはそういう子の言うことだから気にしないでおこうとは考えられずに思いつめてしまったのだと思われる。

② 家庭訪問から学校につなげ、生活空間を徐々に広げていったこと・今出来ることに焦点を当てたこと

スクールカウンセラーが訪問相談を行うことの重要性については数々の研究報告があるが、岩倉(2003)は適切な時期に能動的に関わることの重要性を3事例を挙げて示している。本事例は、学校での相談が難しいが、本人・家族がかなり不安定になっており、早めにある程度の精神病理的な知識を持った者が訪問して関わった方がよいと判断し、訪問に至った。実際に会ってみるとBは精神病理的に重篤な状態とは考えられにくく、かなり現実的な会話を交わすことができた。その結果、Coと話せたことで安心感を感じることが出来たBは、早い時期に学校に来ることができた。

学校の相談室に入室出来るようになったBは徐々に行動範囲を広げていき、時間を増やし友人との交流も増やし、教室に入れるようになった。スモールステップで徐々に目標に近づけて行く方法は学習理論を基盤とした行動療法の基本的な方法であるが、この事例でも、少しずつではあるが確実な方法を実践していった。小林(2003)も、小さな問題解決から始めることが失敗しても解決でき、一挙に大きな問題を解決しようとするよりも、ダメージが小さく確実であるとしている。

また、認知行動カウンセリングの基本原則に「今、この問題」に焦点を当て、解決を図ることがある(伊藤,2005)。本事例でも、過去の体験よりも出来るだけ、今何を考えていてこれからどうしたいかに焦点を当ててカウンセリングを進めていった。Bが気にかけていた進路の悩みから抜け出すには、教室に行くことが良い方法だと考えたBは、より積極的に教室に気持ちを向けていくことが出来た。

③ 母親面接を行ったこと

子どもの問題に対する母親面接の役割・重要性は数々の研究によって示されている(板橋,2004)。

本事例でも母親面接を定期的に行い、家庭で焦らずに接し、Bを安心させて欲しいとお願いした。不登校の子どもは周りの人の態度に非常に敏感になるため、親が焦ることで不安が強い子どもは、より不安を高めてしまうことになる。大半が家に居ることから、家庭での過ごし方は非常に大切である。思春期の時期は特に、自分のことは自分で決めたいと思う気持ちが強い。基本的に自分で決めて行動することを見守り、支えていく事が大切である。

また、母親にとっては、子どもの気持ちが分からないことは不安でもあるし、自分の育て方がよくなかったのではないかと自分自身を責めやすい。Bの母親も非常に心配し、何がいけなかったのかと思いつめていた。そこでCoが面接して母親の不安を和らげるように関わったことで、母親の焦りが減り、Bは安心して教室に復帰することが出来たのだと思われる。

④ 学校の先生方と連携が築けたこと

スクールカウンセラーの役割に教員とのコンサルテーションがある。スクールカウンセラーは基本的には学校内の職務であり、配属された学校の教員と一体となって生徒の問題解決に当たることが大切である。スクールカウンセラーが担任と情報交換を密に行ったことで不登校生徒を教室につなげた、カウンセラーの橋渡し機能に注目した研究もある(福丸,2005)。本事例でも教員との情報交換を密に行い、協力し合い、Bを教室につなげることが出来た。小林(2003)も、本人が拒否しなければ級友や担任と関わることがよいと述べている。相談日以外にBが頼れるキーパーソンとなる先生を作ったことや、学年教員全体でBに関わったことで、Bは学校から見捨てられていないと感ずることができ、両親も学校を信頼し、気持ちが安定した。クラスの生徒にBについて偏見を持たないように先生から伝えて頂けたことも、人目を気にするBにとってはスムーズに教室復帰できる要因だったと思われる。

iii 2事例の比較考察

地域相談室カウンセリングと学校内カウンセリングのそれぞれの特徴について表1にて、比較を行った。以下、表1を参照に具体的に考察を行う。

表1 地域相談室(学校外)でのカウンセリングとスクールカウンセラーによる学校内でのカウンセリングの特徴

	地域相談室(学校外)	学校内相談室
面接形態	母子(親子)別々の担当者によるカウンセリングが可能	母子(親子)同一の担当者によるカウンセリングのみ
本人理解	学校内の情報が得られにくい	学校内の情報が得られやすく客観的判断がしやすい
場所	学校外なので安心して来室できるが教室復帰が難しい	学校内なので来室が困難な場合があるが教室復帰しやすい
学校との連携	外部機関であるので連携が取りにくい	学校内で連携して相談者に関われる
早期対応の可能性	相談者から申し込みを受けてから対応するため困難	心配な生徒に能動的に関われるため早期対応可能

①母子並行面接を別々の担当者が行うこと（地域相談室面接）と、同一担当者が行うこと（学校内スクールカウンセリング）についての比較

今回の2事例では、地域相談室事例では母子別々に違う担当者が面接を行い、スクールカウンセリング事例においては本人と母親を同じ担当者が担当した。カウンセラーが一人しかいない学校では別々の担当者が担当することは不可能である。母親担当と本人担当を別の担当者が引き受ける形で進めていくことと、同一担当が引き受けることには、両方にメリットとデメリットがある。

《親子を別々の担当者が面接を行うこと（事例1）について》

＜メリット＞

相談室で本人担当に専念することで相談者本人に大きな安心感が得られ、本人の側に立って全面的に味方になれる。1つの相談ケースに二人のカウンセラーが担当することは、援助する側にとっても力強く安心でき、また、担当者同士検討を重ねることで本人理解も深まる。実際、事例1でも、Aはカウンセラーとの繋がりを強く感じ、頼りにするようになった。特にAは友人もおらず母親からの関心も薄く、信頼できる他者の存在が重要だったために、Aにしっかり寄り添えたことは面接を進める上でのポイントとなったと考えられる。

＜デメリット＞

母子別々の担当者が面接を行うことは、同じ担当者の目線で母子の特徴を捉えにくい。同一担当者であると母子お互いの言い分の矛盾点・調整点等もすぐ気が付くが、別の担当者であると見過ごしてしまう可能性もある。また、担当者同士が検討できないと、目の前の課題が持ち越しになってしまうこともある。担当者同士の相性・チームワークも重要となる。

《親子を同一担当者が面接すること（事例2）について》

＜メリット＞

母子両方を担当することにより、同一担当者の同じ目線で状態・特徴を感じ取ることができる。表情の微妙な変化、ノンバーバルな側面なども、実際見て感じるができる。小俣（1997,1999）は、この方法の利点として、カウンセラーにとって、親子の相互の関係性をより客観的につかみやすいこと、両者の橋渡しの役割を担えること等を挙げている。事例2のケースでも双方から話を聞くことで、家庭での状況を客観的に理解しやすくなった。特に子どもの話のみ聞くことは、重要な部分が話されなかったり、自分の興味のある事しか話されなかったりする。事例2では今までの生育歴についても、気になっている点を母親から直接聞き取ることができた。また、同一担当者の方が、親子関係の調節役になりやすく、関係がスムーズに保てるような援助が行いやすいことも明らかになった。

＜デメリット＞

一人で相談ケース全体を受け持つ事は、本人の見立て、面接の進め方に不安が伴う。担当者が別にいる場合には相談し合い、考えを言語化する中で曖昧であったものがはっきりとしてきたり、自分の思い込みが訂正されたりする。学校現場にはカウンセラーは一人しかいない。同じ心理としての立場で相談できる相手がいないということは不安が大きい。また、一人であると日程調整が難しいという面もある。親子別々であると、同じ日の同じ時間枠で面接ができず、1ケースに関わる時間が倍必要になる。週1回しか勤務日がないため、学校現場ではカウンセリングを必要としている生徒が非常に多いが、1日で面接できる人数は限られる。毎回母親面接が必要であると思っても現実には間隔をあけざるをえない。

小俣（1997,1999）は、この方法のデメリットとして秘密保持の不安を親子双方に抱かせやすいという危険があると述べている。そして小俣（2002）は、クライアント・親・セラピストの三者間の信頼関係が崩れないように枠を守ることが大切であると論じている。本事例でも、守秘義務を大切にし、情報提供は慎重に行った。

② 本人理解について

事例2のスクールカウンセラーとして関わった場合では、授業の合い間等の短い時間であっても担任、前の担任から詳しい状況を聞くことができ、大変役に立った。授業態度・学力・友人関係等も知ることができ、本人の見立てが立てやすかった。詳しい情報が得られることは、より正確な相談者理解にもつながると思われる。だが、沢山の情報が得られることで、相談者の言っていた内容が事実でないとも判明することもあり、情報を得る目的、利用の仕方を考えていかないと面接が進めにくい場合もある。

③ 相談室の場所について

地域の相談室の面接では、学校以外の場所ということで相談者が安心して来所相談に来られるというメリットがある。相談者が学校の先生や生徒等の人目を気にせずに相談に来られる事は大きな不安の減少になる。事例2のケースにも当てはまるが、いじめによる不登校で学校の建物自体にまで恐怖を感じるようになってしまった相談者も過去にあった。学校とは違う場面で相談を行うことは、本来の相談者の姿が現れやすく、のびのびと振舞える。だが、学校外の相談室では、そこから学校や教室につながる事が困難になる。学校内の相談室であると、連続して教室にもつながりやすい。

④ 学校との連携について

相談室が学校内にあると、先生方との連携が取りやすく、学校の様子が分かりやすい。事例1でAは、「先生も友だちもろくな奴がない」と言っていたが、実際の状況は分からなかった。初期はAのわがままな特徴が見えにくかったため、担任の先生の目には困った存在と映る事が理解できずに、教師の対応が冷たいと思われ協力は難しいと考えてしまった。実際の状況が分かれば、担任の先生にも共感でき、適切な助言もできたかもしれない。中川(2005)によると、スクールカウンセラーは、相談者への援助のために、相談者援助に関わるリソースである人々の主観的な世界を理解し、彼らの気持ちに配慮していくことも必要であるとしている。

また、学校内でカウンセリングを行うと、学校での相談者の状態や、担任の特徴もよく見えてくる。教師のタイプにより、やりやすい対応をお願いしていくことや、教師に共感し共に問題解決に向かうことができる。また、現実が見えることによって相談者をうまく支援していくための材料が見つけやすい。教室復帰に向けて具体的に取り組んで行くことを目標とするならば、学校内で相談活動を行うことの方がメリットがあるように感じる。だが、教師との関係が悪化したり、足並みが揃わないと結果、状況を悪くすることも考えられるため、注意が必要であると思われる。

⑤ 相談までの期間について

スクールカウンセラーであれば、学校内の情報が伝わりやすく、不登校期間が短期間の内に相談を行える。学校復帰を目標に置くならば、学校組織の一部として関わる方が素早く対応でき、早い展開が期待出来ると考えられる。また、カウンセラー側から積極的にカウンセリングを提案することもできる。困難な状況になる前に予防的に関わることもできる。最上(1995)も、スクールカウンセラーは、生徒の状態を直接把握することができるため、適切な働きかけをすることで予防的に関わる事が求められていると述べている。地域の相談室では、基本的に申し込みがきたら相談を受けるという形態であるので、不登校が長引き1年たった状態から面接を開始するような状況もある。相談を行う側としては相談者が本当に困って相談に来るため、動機が明確であり、カウンセリングを深めやすいとのメリットもある。しかし、早期対応・早期解決のためには、学校現場でタイミングよく関わる事が重要であると思われる。

IV. おわりに

以上、本研究では不登校2事例を振り返り検討を行った。事例1は、カウンセラーが相談者の気持ちの拠り所となり、適応困難にしている特徴を、プラスの行動をフィードバックしつつ成長させていった。事例2では、タイミングを逃さずに家庭訪問をし、母親面接と教師との連携により教室復帰が可能となった。2つの事例を比較検討した結果、学校外相談室における関わり方と学校内スクールカウンセラーの関わり方にはそれぞれ特徴があり、カウンセラーの置かれた状況により相談手法を変える必要があることが分かった。実際の現場では、状況に応じた臨機応変で柔軟な対応が求められており、そのためにカウンセラーは常に有効な援助を考え、行っていかなければならない。カウンセラーは、その状況で得られる資源を十分に活用して、専門家としての力を発揮し、相談者の心の成長に寄与することが望まれていると考える。

【引用・参考文献】

- 福丸由佳 2005「中学校における不登校の女子とのかかわりースクールカウンセラーの橋渡し機能に注目してー」心理臨床学研究23(3),327-337
- 岩倉 拓 2003「スクールカウンセラーの訪問相談 不登校の男子の3事例の検討から」心理臨床学研究20(6), 568-579
- 板橋登子 佐野秀樹 2004「不登校児の母親についての研究の現状と課題」カウンセリング研究37,74-87
- 岩本隆茂 大野裕 坂野雄二 共編 1997『認知行動療法の理論と実際』培風館
- 伊藤絵美 2005『認知療法・認知行動療法カウンセリング』星和書店
- 河村一夫 勝倉孝治 編著 2004『臨床心理学からみた生徒指導・教育相談』
- 河村茂雄 武藤由佳 粕谷貴志 2005「中学校のスクールカウンセラーの活動に対する意識と評価ー配置校と非配置校の比較ー」カウンセリング研究38,12-21
- 粕谷貴志 河村茂雄「2004中学生の学校不適応とソーシャルスキル・および自尊感情意図の関連ー不登校群と一般群との比較ー」カウンセリング研究,37,1-8
- 鴨澤あかね 2003「不登校児の母親面接ー公立教育相談室における援助ー」心理臨床学研究21(3),125-136
- 小泉隆平 2005「不登校女子高生との同一セラピストによる母子並行面接ー」心理臨床学研究23(2),244-255
- 小早川久美子 1999「認知療法の有効利用に関する一考察 主訴の軽減からパーソナリティ変容への技法的展開」心理臨床学研究17(4),378-389
- 喜田裕子 2000「公立の教育相談室における心理面接の1事例ー治療構造論的観点からー」心理臨床学研究17(6),594-605
- 小林正幸 2004『不登校の子への援助の実際』金子書房
- 小林正幸 3003『不登校児の理解と援助』金剛出版
- 小林幹子 2001「教育相談における地域連携を目指した実践的研究」心理臨床学研究19(1),181-191
- 馬殿禮子 1998「教育センターの相談係の立場から」
- 氏原 寛 村山正治編『今なぜスクールカウンセラーなのか』ミネルヴェ書房,163-183
- 最上貴子 1995「学校という場におけるカウンセリング」
- 日本臨床心理士資格認定協会 2004 学校心理士の活動と専門性
- 小俣和義 1997「同一治療者による母子並行面接の意味」心理臨床学研究,15(1),46-57
- 小俣和義 1999「母親と協力して支えた思春期女子の事例」心理臨床学研究,16(6),538-549
- 小俣和義 2001「同一セラピストにおける母子並行面接の導入と勧め方」心理臨床学研究19(2),119-121
- 小俣和義 2002「同一セラピスト母子並行面接における「枠」の重要性」心理臨床学研究20(4),324-335